

何を書くか、どう書くか

—Andrea Levy の *Every Light in the House Burnin'* と *Fruit of the Lemon*—

濱 奈々恵

はじめに

「皆さまにお詫びを申し上げます。不安な思いをさせてしまい、本当に申し訳ありません」¹

2018年4月16日、当時イギリスの首相だったテリーザ・メイ（Theresa May）は、12名の議員とテレビカメラの前に謝罪の言葉を述べた。謝罪の対象となった「皆さま」は集まった議員だけでなく、イギリス国内に住むカリブからの移民、通称「ウィンドラッシュ世代」（Windrush Generation）と呼ばれる人々である。彼らは公的な出生証明を持っていないとの理由から、不動産賃貸の契約や医療を含む社会保障を受けられず、住む家や職を失うどころか、場合によっては強制退去を余儀なくされた人たちである。メイ元首相はカリブ移民たちへの不当な扱いを謝罪するとともに、イギリス社会における彼らの貢献に感謝し、イギリスで生活する権利を保障した。日本ではあまり報道されることがなかったニュースだが、イギリスの「今」を考える際には避けて通ることができない問題である。

メイ元首相の謝罪から間もない同年5月31日、大英図書館で「ウィンドラッシュ展」（Windrush Exhibition）と題する企画展が始まった。²当日のガーディアン紙には「時宜を得た開催」（timely openings）との見出しがつけられ、先の謝罪会見とともに当時の世論を動かす契

機となった。しかし、文学研究においてはもう少し早い段階でウィンドラッシュ世代は注目されていたのかもしれない。³その存在を世に知らしめたのはサム・セルボン（Sam Selvon, 1923-94）で、彼の出世作『ロンリー・ロンドナーズ』（*The Lonely Londoners*, 1956）はメイ元首相の謝罪会見直後からロンドン市内の本屋で山積みされる事態となった。本稿で取り上げるアンドレア・レヴィ（Andrea Levy, 1956-2019）は、この本が出版された時に誕生したジャマイカ系イギリス人作家で、彼女の本もまたセルボンの本と並んで、ロンドン市内の本屋を賑わせた。本稿ではまず、ウィンドラッシュ世代とレヴィが誕生した背景を概観し、続けてレヴィのデビュー作『家中の灯がともる』（*Every Light in the House Burnin'*, 1994）と第三作『レモンの実』（*Fruit of the Lemon*, 1999）を取り上げて、「第二世代」の苦悩、白人の影、そして最後に「書き残す」という作業について論じていく。

1. 「ウィンドラッシュ世代」とアンドレア・レヴィの誕生

1948年、イギリスは英国国籍法（British Nationality Act）を成立させ、英連邦市民にイギリスでの居住、および労働の権利を与えた。当時のイギリスは戦争による労働力不足が深刻であったため、これを補う狙いがあった

¹ メイ元首相の発言内容を書き起こすと、次のようになる。“... and I want to dispel any impression that my government is in some sense clamping down on Commonwealth citizens, particularly those from the Caribbean who live a life here. I take this issue very seriously. The home secretary apologised in the House of Commons yesterday for any anxiety caused. And I want to apologise to you today. Because we are genuinely sorry for any anxiety that has been caused.... Those who arrived from the Caribbean before 1973 and lived here permanently without significant periods of time away in the last 30 years have the right to remain in the UK, as do the vast majority of long-term residents who arrived later. I don't want anybody to be in any doubt about their right to remain here in the United Kingdom.”この発言はBBCとガーディアンのウェブサイト参照し、それぞれの映像でカットされた部分を補っている。

² 企画展は2018年5月31日から10月21日まで開催された。本稿の執筆者はこの期間中、イギリスで研究活動をしていたため、実際に現地を訪問する機会に恵まれた。ウィンドラッシュ世代に関わる新聞や雑誌の記事、映像、音声といった資料だけでなく、写真や私物、執筆原稿などの資料も多数展示されており、それを人種や性別、年齢を問わず、多くの人が興味深そうに閲覧していたのが印象的であった。

³ 本稿の執筆者は2006年の7月から8月に、エジンバラ大学にて現代英文学の講座を受講した。2006年8月4日、「ポストコロニアル・ロンドン」の講義を行ったゲイル・ロウ（Gail Low）講師（当時）が、「ポストコロニアリズムに関する研究には、もうすでに10年以上の歴史がある」と述べて、サム・セルボンとジョージ・ラミング（George Lamming, 1927-）の名を挙げている。この当時、「ウィンドラッシュ世代」という言葉がすでに一般的に使われていたのかは定かでないが、先に挙げた二人は「ウィンドラッシュ世代」の代表格である。他にもジャン・リース（Jean Rhys, 1890-1979）やキャリル・フィリップス（Caryl Phillips, 1958-）らにも触れていたことから、少なくともカリブ系作家への注目は集まっていたと言える。

たとえられる。同年6月22日、ロンドンのティルベリー港に1隻の船がたどり着く。船の名前はエンパイア・ウィンドラッシュ号 (Empire Windrush) で、「母国」イギリスの呼びかけに応じた492人の乗客がジャマイカからはるばるやってきた。彼らは西インド諸島から最初の移民としてイギリスに入港した人たちで、後に船の名前にちなんで「ウィンドラッシュ世代」と呼ばれるようになる。メイ元首相はこの船でやってきた人たちと、その家族に対して謝罪していたのである。

乗船チケットは片道28ポンドで、西インド諸島の平均収入が週に3ポンドから6ポンドであった事情を鑑みると、当時としてはかなりの高額であったと言えるだろう (Gifford 7)。入港時のニュース映像を見ると、そこに映る移民たちは皆スーツ姿で、きちんとした身なりをした人ばかりである。貧しさゆえに移住を決意した人もいただろうが、映像には悲壮感が漂っておらず、むしろ誇らしげな表情に満ちている。⁴つまり、彼らは移住せざるを得ないほどに生活が困窮していたというよりも、むしろ移住できるだけの金銭力があつたと考える方が妥当であろう。ただ、所帯を持つ人の場合はず、男性だけが先に移住し、ある程度生活の基盤ができてから妻や子供たちを「母国」に呼び寄せるのが一般的だったようだ。家族全員の乗船チケットを手に入れることは、それほど難しいことだったのである。

この船に乗っていた492人のうちの一人が、アンドレア・レヴィの父ウィンストン (Winston)・レヴィである。移住前の彼は、製糖会社テート・アンド・ライル (Tate & Lyle) の簿記係として働いており、ジャマイカでは比較的、社会的地位が高かったと考えられる。ウィンストンがロンドンのアールズ・コート (Earl's Court) に居を構えてからおよそ半年後、新妻のエイミー (Amy) もジャマイカからやってくる。エイミーはジャマイカで教師として働いていたため、彼女も夫同様に、あるいはそれ以上に良い仕事に就いていたと言える。夫妻は新天地でもジャマイカと同等の生活を期待していたようだが、「ジャマイカでの恵まれた地位はイギリスで通用しなかった」 (Younge) ため、ジャマイカで中流階級にいた夫妻はイギリスで一気にその地位を下げることになった。レヴィが記したエッセイ (“This is my England”、以下“England”と略記) によると、ウィンストンは肌の色のせいで、住む家も職もなかなか見つけられず、後から合流したエイミーにいたってはジャマイカでの教員免許をイギリスで使うことが許されなかった。そのためエイミーは縫い物仕事でわずかな生活費を稼ぎ、イギリスで生まれた4人の子供を育てながら新たに教員

免許を取得すべく、夜な夜な勉強した。レヴィが8歳の頃に母はイギリスで使える教員免許を取得し、再び教師としての生活を歩み始めている。

1948年の法律をきっかけに、ウィンストンやエイミーらをはじめとする西インド諸島の人たちは、イギリスに移住する機会を得た。その結果、イギリスには西インド諸島、インド、パキスタンなどから大量の移民が押し寄せるようになる。事態を重く見た政府は、1962年に英連邦移民法 (Commonwealth Immigrants Act) を成立させ、労働許可 (Work Permit) 制度の導入に踏み切る。これによってある程度、移民の流入を制限することが可能となり、以前ほど容易に移住することはできなくなった。移民に対する締めつけはその後さらに強まり、特に子供たち、つまり第二世代の扱いをめぐる法律が施行されるようになる。たとえば、1971年の移民法 (Immigration Act) では、本人 (= 子供) かどちらかの親が本土生まれの場合に限り居住権を付与するとの決定が下され、1981年の英国国籍法 (British Nationality Act) では、両親のいずれもが本土生まれである場合に限り、その子供に市民権を付与することとなった。

アンドレア・レヴィとその一家の場合、深刻だったのは政府の法律による締めつけよりも、むしろ彼女たちを取り囲む共同体の反応だった。夫妻が移住してきた1948年当時、居住区であったロンドンは現在ほどに多文化の様相を呈しておらず、実際、レヴィは後のインタビューで「当時、私たちが住んでいた教区にはうちともう一軒だけが黒人の家族だった」 (Young) と述べている。それのみか、この家族とは一度も言葉を交わすことがなかったようで、レヴィ一家はいわゆる「家族づきあい」というものとは無縁の生活をしていたことをうかがわせる。苦労して再び教員免許を取得した母エイミーにしても、「私が教師だった時、何人かの親たちが子供たちを教室から連れ出した」 (Hickman) ようで、親たちから認められていなかった事情を吐露している。一家は、世間の冷たい目とあからさまな差別から免れることはできなかったのだ。

両親が中流階級から地位を下げたのとは反対に、アンドレア・レヴィの場合は労働者階級に生まれながらも高等教育を受けることで、下から上へと社会的な階級を変えることができた。しかしながら、人種問題について学ぶワークショップに参加していたある日、彼女は強烈な体験をする。「白人」と「黒人」のグループに分かれるようにと指示が出され、彼女は「白人」のグループへと歩み寄る。「ちょっと、あなたはあっちでしょ!」と言われた瞬間、彼女は人生で初めて自分の立ち位置を知る

⁴ 最初の船が到着した時の映像は、Youtube (<https://www.youtube.com/watch?v=9F6lsLRdZ-o>) で確認することができる。この中でロード・キッチナー (Lord Kitchener, 1922-2000) が「ロンドンは僕の場所」 (London is the Place for Me) を歌う姿が残っている。イギリスを「母国」 (Mother Country) と呼び、「君もこのロンドンに戻ってくるべきだ (you must come back to London city)」と嬉しそうに歌う姿に、彼らにとってのイギリスがどれほど大きな意味を持っていたかは容易に想像がつく。

ことになったのだ（Young）。ロンドンで生まれ、ロンドンで育ち、ロンドンで教育を受け、完璧なコックニーを話そうとも、彼女は決して大多数を占める「白人」グループの一員ではないことを思い知らされる。

当時レヴィが感じた疎外感こそが、彼女の執筆の原動力であろう。母から常々、「フィクションからは何も学べない。何か学びたいのならば、ノンフィクションを読みなさい。フィクションは作り物、ただのお話」と言われてきたレヴィだったが、彼女は「フィクションこそ強力な政治的な武器になる」と認識し（Rowell 260-61）、小説の創作コースで執筆の腕を磨く。ここで書いた小説が『家中の灯がともる』となって出版され、作家アンドレア・レヴィが誕生するに至ったのである。彼女にとっての大きなテーマは「自分がどこから来たのか」、つまり自分のルーツをめぐるもので、これはブッカー賞の最終候補に残った『長い唄』（*The Long Song*, 2010）まで貫かれている。レヴィが描く疎外感や人種差別に根差すものが多いが、それを「第二世代」の苦悩として捉える点が特徴的である。この点について次節で考察したい。

2. さまよう「第二世代」

デビュー作『家中の灯がともる』（以下『灯』か *Light* と略記）と第三作『レモンの実』（以下『レモン』か *Lemon* と略記）はともに、レヴィの人生を色濃く反映した半自伝小説である。『灯』では過去と現在が交互に語られ、奇数章で主人公アンジェラ・ジェイコブ（Angela Jacob）の幼少期を描き、偶数章では癌になった父を看病する現在のアンジェラが描かれる。一方、『レモン』では主人公フェイス・ジャクソン（Faith Jackson）の学生時代と社会人になってからの様子が描かれ、後半部分ではフェイスがジャマイカへ短期間の旅に出る。両作品に共通するのは、小説の出だしが両親のルーツに関わる記述で始まるという点である。

My dad was from Jamaica—born and bred. He came to this country in 1948 on the *Empire Windrush* ship. My mum joined him six months later in his one room in Earl's Court. He never talked about his family or his life in Jamaica When I asked my dad about the photo that fascinated me, he would grudgingly admit that it was where he lived. But when I pressed him to tell me more he would shrug and tell me not to bother him. (*Light* 3)

'Your mum and dad came on a banana boat,' that was what the bully boys at my primary school used to say 'Faith is a darkie and her mum and dad came on a banana boat.' . . .

My mum and dad never talked about their lives before my brother Carl and I were born. (*Lemon* 3-4)

1948年に父がウィンドラッシュ号で来たという記述や、その半年後に母が合流したという記述などは、レヴィがインタビューで話してきた通りのものである。また家族構成や経歴などもレヴィ本人とその周辺人物にモデルを見つけることができるため、レヴィの生涯を知る読者にとってはお馴染みの設定だと言える。ただ小説の中では、両親が自分たちの過去を語ろうとせず、彼らのルーツは謎に満ちたままになっている。『灯』のアンジェラも『レモン』のフェイスも、両親に出自に関する問いを何度か投げかけているが、詳しい説明は聞き出せない。この両親の沈黙によって、ウィンドラッシュの第二世代（=子供たち）は親たちが経験したとは別の苦労を強いられることとなり、レヴィが小説の中心に据えるテーマにたどりつく。

第二世代が経験する苦労、それは帰属意識に関わるものである。簡単に言えば、彼ら第二世代は自分たちの居場所だと思ったところで「違い」を指摘され、それを機にアイデンティティ・クライシス（自己喪失）に陥る。たとえば、『灯』のジェイコブ一家は公営の集合住宅に住んでいるが、ここには白人の子供たちも住んでいる。アンジェラと兄のジョン（John）には共通の友人がおり、普段は白人の子供たちとも仲良く遊んでいる。だがある日、ちょっとしたことでジョンは友人と喧嘩をし、一斉攻撃を受けるはめになる。その時に使われる言葉が 'golliwog'、'nig-nog'、'Blackie' (*Light* 57)、'coons' (*Light* 58) などで、他にも「お前はイギリス人じゃない。父さんが言ってた」や「ジャングルから来たんだろ！ジャングルに帰れ！」 (*Light* 57) といったものまである。アンジェラも教会に通っていたある日、「黒人はみんな汚い」 (*Light* 144) と指をさされ、もう一人の黒人少女エイダ（Ada）とともに蔑みの対象となる。仲間だと思った友人にバカにされた後、アンジェラは一部始終を母に話すが、その時の返事は「私はここの出身よって言って、無視しなさい」 (*Light* 58) や「ここで生まれたって言いなさい」 (*Light* 59) の一言である。教会でアンジェラが蔑まれた時にも、牧師はアンジェラとエイダを皆の前に立たせ、「エイダとアンジェラとその家族は有色人種（coloured）だけど、それ以外は一緒だよ」 (*Light* 145) と発言し、人目にさらされた二人をさらに狼狽させる。

レヴィはどちらのエピソードに対しても、語り手に扮して、あるいはいずれかの登場人物の姿を借りて説教じみた発言を差しはさむことがない。むしろここで顕著なのは、アンジェラとジョンの周りにいる残酷なまでに無邪気な子供たちの姿と、「父さんが言ってた」や「ママ

が言ってたんだけどね」(*Light* 43) のように親の言葉をそのまま聞き入れる残酷なまでに素直な子供たちの姿である。そのうえで、子供たちの発言を訂正しない親の曖昧な態度や、大人の不用意な助け舟がさらなる差別を助長する可能性を描き出すことで、無責任な大人の姿を浮き彫りにする。

『レモン』のフェイスはイズリントン (Islington) で暴動を目撃し、黒人女性が血だらけになっている現場に居合わせる。イギリス国民戦線 (National Front) が左翼系の本屋を標的にして、「黒人および第三国の小説にはスプレーで WOG と書きなぐっていた」(*Lemon* 152) 時代に、フェイスは自分とよく似た人が襲われたことに衝撃を受ける。住んでいたフラットに戻ったフェイスは、同居している仲間に事件のことを話すが、親身になって話を聞いてくれる人がいない。『灯』ほどに残酷な子供たちは登場しないものの、次は自分が襲われるのではないかと恐れるフェイスは、冷めた反応の友人たちとの間に温度差を感じて、部屋に引きこもる。心配した両親は彼女の部屋を訪れ、「ジャマイカにいる伯母さんは貴女のことを気に入ると思う。訪問するなら今が良いタイミングだと思うのよ」(*Lemon* 162) と話して、フェイスにジャマイカ行きを勧める。実はフェイスの両親はこの時点で、イギリスからジャマイカに移り住む計画を明かしている。その時のフェイスの反応が興味深い。

I went to smile but I couldn't. 'Going home to Jamaica,' I eventually said. I had then intended to say, 'Fantastic! I can come and visit,' but instead I said, 'Why?'

'Your dad and me are getting old now,' Mum started, 'and we feel that you and Carl are grown-up, so we can go home and...'

I'd stopped listening. Because what I meant by why, the question I wanted answering was, why Jamaica? Why is Jamaica home? (*Lemon* 45)

フェイスにとっての故郷 (home) はイギリスだが、両親にとっての故郷はジャマイカである。親と子の間で故郷にズレが生じ、またフェイスの場合は両親がジャマイカからやってきた経緯を聞かされないため、自分の立ち位置を把握することができない。

『灯』でも同様の状況を読み取ることができる。観察眼が鋭いアンジェラは教会に行くたびに「母がそっと軽やかに歩き、コツコツと足音がしないように歩いている」(*Light* 10) のを不思議がる。当初は単にマナーの問題なのだと思っていたアンジェラだったが、実は人目を避けることが目的なのだと理解する。この不満は次第に、故郷に対する感覚のズレに結びついていく。

I knew this society better than my parents. My parents' strategy was to keep as quiet as possible in the hope that no one would know that they had sneaked into this country. They wanted to be no bother at all. But I had grown up in its English ways. I could confront it, rail against it, fight it, because it was mine—a birthright. (*Light* 88)

『レモン』の場合と同様に、「母国」イギリスに移住してきた両親にとって、イギリスは決して故郷ではない。しかし、イギリスで生まれ育ったアンジェラにとって、イギリスこそが故郷である。そのため他人の目を気にしてコソコソ暮らす両親の姿に憤りを覚え、アンジェラはその怒りをあらわにする。イギリスでイギリス人として育とうとも、友人からは「イギリス人じゃない」と疎外されるが、だからといって両親の故郷であるジャマイカにつながりを感じることはできない。第二世代は居場所を見つけれないジレンマを抱えたまま、社会の中でさまようことを余儀なくされるのだ。

3. 白人の影

『灯』においても『レモン』においても、白人の影は必ずどこかにチラつく。『灯』のアンジェラにはイヴォンヌ (Yvonne) とパトリシア (Patricia) という二人の姉がおり、年頃の彼女たちは音楽や洋服などの流行にうるさい。母は娘三人を連れてカリブ系の女性が経営する美容室に行くが、長女と次女はシラ・ブラック (Cilla Black, 1943-2015) やキャシー・カービー (Kathy Kirby, 1938-2011) など、当時テレビを賑わせていた白人の歌手を真似たがる。末娘のアンジェラはまだそれほど感化されていないため、毛染めをする母の様子に興味深げに眺めたりするのだが、母とカリブ系の美容師が話す内容が全く理解できずに面食らう。というのも彼女たちが話していたのは「強めのカリブ訛り」(*Light* 168) の英語であったため、イギリスで生まれ育ったアンジェラには外国語にも匹敵するほどの言葉だったのだ。

白人への憧れや白人に近づこうとする様子は、レヴィの作品においてよく描かれる。『灯』の場合はこの美容室でのエピソード以外にも、父方の叔母ドリーン (Doreen) が遊びに来た場面でも明らかにされる。ドリーンはスコットランド人と結婚し、夫のアンドリュー (Andrew) はグラスゴーで教師として働いている。大人たちの会話を聞いていたアンジェラは、ここで妙なことに気づく。

'We did some travelling around,' Andrew interrupted. His accent was strange—part Jamaican, part Scottish. I had to listen carefully to understand

him.

'Oh, travelled round,' my dad repeated.

'To the highlands,' Andrew said.

'Oh, that's lovely,' my mum said, but her accent had changed. She spoke like someone announcing a programme on television. I stared at her. 'I love the highlands,' she went on. (*Light* 121)

あれほどカリブ訛りの強い言葉を話していた母が、義妹夫妻を前にした途端、その訛りを消した話し方に変えたのである。そもそも「ハイランドって大好き」と話す母だが、よくよく聞いてみると実は一度も行ったことがなかったり、ジャマイカで恵まれた生活をしていると信じ込ませようと、そろそろカラーテレビが家に届くと嘘をついて、見栄を張ったりもする。幼いアンジェラは大人の思惑を理解できないため、いつカラーテレビが届くのかと大騒ぎして、両親に恥をかかせる。

レヴィは登場人物を描写するたびに必ず、髪の毛（ストレートか縮れ毛か）、鼻（高いか低い）、唇（薄いか厚いか）、そして肌の色について説明を加える。これによって彼らの出自をある程度分類することができるが、白人的な要素の有無は大きな問題をはらんでいる。『灯』の母ベリル (Beryl) は「色白で白人のようだ」(*Light* 166) と描写され、兄ジョンは赤毛の持ち主である。「貴方にはスコットランドの血が入っているから」(*Light* 15) とは言うものの、母は先祖のことを詳しく話そうとしない。ただ、母はその事実を少し誇らしげに話し、ジョンも誇らしげに耳を傾ける。ほんの少しであっても白人のルーツがあることを想像させる外見をしていれば、そのことが後の人生に大きな影響をもたらすのである。たとえば、『レモン』に出てくるネルソン (Nelson) はフェイスの曾祖母セシリア (Cecilia) が育てた子供で、複雑な出自を持つ。セシリアの夫はキューバ人女性との間に8人の子供とヘスター (Hester) という娘をもうけ、このヘスターがネルソンを生む。しかしヘスターはネルソンの父ではない別の男と駆け落ちし、ネルソンを捨てる。セシリアは自分の子同然に彼を育てるが、彼は結婚の話を持ち上がった途端、セシリアと縁を切る。相手の女性は白人で、彼女はネルソンを白人だと思い込んでいる。そのため、「どんなに見た目が白人に近かろうと、先祖に奴隷がいたことがバレた途端、黒人扱いされ」(*Lemon* 267) で、人生がダメになるのだ。

『灯』では白人が憧れの対象であったのに対して、『レモン』における白人は単なる憧れでは片づけられない。彼らにとってそのルーツに白人が存在することは、これから生きる上での希望となり、運命を大きく変える要因でもある。ただし、カリブの人たちの場合、同じ両親に生まれた子供でも肌の色が若干違うというのは珍しくないようだ。これは『灯』の子供たちでも描写される内容

であるし、また『レモン』でアンジェラが会いに行った伯母さんの子供（＝アンジェラのいとこ）は、長女ポーリーン (Pauline) が父親似で明るい肌の色 (light skin)、一方、長男ヴィンセント (Vincent) は母親似で濃い肌の色 (darker) をしている (*Lemon* 193)。結婚相手を選ぶ時にも肌の色が明るい人が好まれ、家庭の経済状況やその人の性格などは二の次になる。レヴィの第二作 (*Never Far from Nowhere*, 1996) の中心テーマはこの問題で、肌の色が違う姉と妹はそれぞれ全く違う人生を送ることになるのだ。

『レモン』でアンジェラがジャマイカに行った理由は、ロンドンの生活から少し距離を取ること、そして両親のルーツを知ることにあつたのだが、そのルーツにはことごとく白人男性の影がチラついている。開拓者としてジャマイカに入った彼らのそばには女性がおり、廻れば廻るほど、彼女たちの名前は忘れ去られて、単に「誰々の母」や「奴隷」といった記号と化していく。中には「その人たち(白人男性と奴隷の女性)は恋に落ちた。そう、きっとそうだと思う (Yes, I suppose so.)」(*Lemon* 241) という一言が添えられ、二人の結びつきが決して非道徳なものではなかったことを強調することもある。とはいえ、このルーツをたどるプロットにおいて、レヴィは決して白人の行為を非難したり、自分たちの祖先を被害者に位置づけることはしない。彼女が目指したのはむしろ、白人、黒人、イギリス人、ジャマイカ人など、人間の属性に線引きをすることの難しさ、不毛さを提示することにあつたはずだ。実はレヴィの母方の曾祖父はスコットランド人で、父方の祖父はユダヤ人 (“This is my England”), そして「お母さんのお母さんのお母さんのお母さんが奴隷だった」(Hickman) ようで、彼女はその延長線上に自分がいることを認識している。加えてレヴィは、カリブに出自を持つ人が乱暴にも「黒人」に分類されることをひどく嫌い、作品内では「白」「黒」に勝って「茶色」が頻繁に使われている。なおかつ、肌の色を描写する時には、ライトブラウンやダークブラウン以外にも「落ちたばかりのトチの実 (conker)」(*Lemon* 139)、「キャラメル」(*Lemon* 181) など、微妙な色の差にきちんと説明を加える。茶色の使用は人間の肌の色だけにとどまらず、室内の様子や持ち物などあらゆることにも及んでおり、読者の意識を「茶色」に向けようとする。レヴィの目的は色による乱暴な線引きに抵抗を示し、カリブの存在を組み込むことにあつたのだ。

4. 書き残しの作業

1948年にイギリスへ移住したウィンドラッシュ世代の中には、イギリスで社会的な成功を収めた人もいる。たとえば、到着時の映像に映っていたロード・キッチナーはその後、マンチェスターでナイトクラブの経営者にな

り、カリブ音楽 (Calypso music) の普及に寄与した。彼は1962年に故郷のトリニダード・トバゴに帰国し、2000年に77年の生涯を閉じた。同じ船に乗っていたサム・ビーバー・キング (Sam Beaver King, 1926-2016) は西インド諸島出身者をターゲットにした新聞『ウェスト・インディアン・ガゼット』をロンドンで刊行し、ロンドン・サザーク区の市長を務めて、90歳で亡くなった。ウィンドラッシュ号に乗船した当時、最年少の13歳だったヴィンセント・リード (Vincent Reid, 1935-2001) はサセックス大学で歴史学を教え、66歳でこの世を去った。第一世代の人々が人生の終焉を迎えつつある近年、彼らの物語を残そうとする動きが強まってきている。

『ウィンドラッシュ世代の声』 (*Voices of the Windrush Generation*, 2019) や『母なる国』 (*Mother Country*, 2019) などはその一例であるが、出版年から推測するに、メイ元首相の謝罪が一つの契機となったと言っても間違いではないだろう。それよりも早い段階で彼らの物語を伝えようとしていたのが、レヴィとその先駆者であるサム・セルボンである。そもそも彼らはなぜ、ウィンドラッシュの物語を書こうと思ったのだろうか。

先に述べた通り、レヴィが小説を書く原動力はイギリスにしながら、イギリス人として認められない疎外感、ジャマイカにルーツを持ちながら、そこにつながりを見出せない疎外感である。レヴィは他者との接点を通じて、自分が「黒人」に分類されることを認識し、それ以来、「黒人」という存在を意識し始める。彼女は生きるヒントを求めて「黒人」を描いた小説に手を伸ばすが、「アフリカ系アメリカ人にはたくさんの奴隷物語 (slave narrative) があるが、カリブの人たちにはそれが無い」

(Rowell 266) ことに気づく。彼女が本を書く目的は、この穴を埋めることにあったのだ。カリブの存在を知らしめるという点で言えば、レヴィも読んでいたサム・セルボンの作品も大きな貢献をしている。ただ、セルボンの場合は第一世代の視点で作品を書いているのだが、レヴィの場合は第二世代の視点で自分と両親の物語を書いているのが大きな特徴だと言える。⁵

レヴィの母は後に、短期間だけ故郷のジャマイカを訪問したようだが、父は一切それを望まなかったようだ。

「記憶の中にあるジャマイカを好み、家族も友人ももうそこにはいないと言っていました。父はイギリスを故郷にしていたんです (He had made his home England.)」

(“England”) と語っていたレヴィは、父が亡くなった直後からデビュー作の『灯』に取りかかっている。おそ

らく父の死は作品に大きく影響しているはずで、『灯』では娘と父の物語が交互に語られ、作品内の「現在」では父が痛に苦しんでいる。アンジェラの記憶に生きる父は大きな体をした怖い人だったのだが、「現在」の父は記憶が曖昧で、次第に応答することができなくなって死ぬ (*Light* 246)。アンジェラは弱っていく父を前にしながら、幼い頃の記憶に残る父の姿をたどる。過去と現在を結びつけることで、アンジェラは自分の物語を紡ぎながらも、父の人生を記録に残すことに成功する。レヴィは故郷をイギリスに決めた父の決意に寄り添い、父が存在した証を残したかったのだろう。

カリブ系作家の先駆者であるセルボンは、カリブの存在を知らしめるために、自分の経験をかなり作品に投影している。これが当時の読者にとって新鮮なものだったのは間違いない。だが彼の小説が成功した秘密は、カリブ系の英語 (Caribbean English) を小説に取り入れて、作品に新しい命とリズムを生み出したことにあった (*The Lonely Londoners* vi)。つまり、「何を書くか」だけではなく、「どう書くか」という点も重要なのである。レヴィの場合、第一作の舞台は1960年代のイギリスで、過去と現在を行き来しながら、自分と父の物語を書いていった。第二作では1970年代を舞台とし、肌の色が違う姉妹の物語を書きながら、第二世代の視点を維持した。第三作の『レモン』からはそれまでのスタイルと若干異なり、半自伝小説という枠組みから脱している。その証拠に、レヴィを思わせる主人公個人の物語から、何世代も前の人たちの物語へと移行しているのである。

レヴィは第二作を完成させた後、自分のルーツであるジャマイカを実際に訪問している。『レモン』はその時の経験がもとになったもので、イギリスで働く主人公フェイスが、ジャマイカを短期間訪問し、またイギリスに戻ってくるという話である。出発前のフェイスは、ジャマイカに対してかなりの偏見を持っている。ところが、ジャマイカ行きの飛行機に乗ったところ、パイロットが女性であることを知り (*Lemon* 167)、イギリスとは違って女性が望み通りの仕事に就ける現実に驚く。伯母の家に到着してからも、想像していたものとは比べものにならないくらいおしゃれで近代化した室内に驚き、思わず自分の家を思い出すほどであった (It reminded me of my home.) (*Lemon* 180)。到着の翌日から、母の姉にあたるコラル (Coral) 伯母さんが家族のことを話しはじめる。フェイスは伯母の話聞きながら、自分のルーツを少しずつ整理していく。この一連の作業の中で最も

⁵ 『ロンリー・ロンドナーズ』はトリニダード・トバゴからイギリスに移住して10年になるモーゼズ・アロエッタ (Moses Aloetta) が、西インド諸島から来る新たな移民を「先輩移民」としてサポートするという話である。これは後に「モーゼズ三部作」と呼ばれる作品群になるが、その二作目 (*Moses Ascending*, 1975) では移民者とイギリスで生まれた第二世代とのジェネレーション・ギャップが巧みに書かれており、いつも何かにおびえてコソコソ暮らす第一世代と、黒人の人権を叫び、デモ行進に参加して存在を知らしめようとする第二世代との対照的な姿が浮き彫りにされている。三作目 (*Moses Migrating*, 1983) でモーゼズは故郷に「帰る」が、そこがすでに自分が知る故郷ではなくなったことにショックを受ける。結局モーゼズは再びイギリスに「戻る」が、入国審査を受けながら、イギリスも自分の場所ではないことを痛感する。

特徴的なのが、フェイスが作る家系図である。当初は自分たち家族と、コラル伯母さんを含む母の姉たち、伯母の子供たち、母方の祖父母だけでできていた家系図が、次第に広がりを見せ、最終的にはフェイスの5～6代前の先祖にまでつながっていく。家系図ができていくのにしたがって、縦と横のつながりや、それぞれの人がどのような人生を送ったのかが明確になっていく。セルボンらしさがカリブ系の英語にあるとすれば、レヴィらしさは先祖とのつながりを家系図で表し、過去とのつながりを明瞭に認識させた点にあると言えるだろう。レヴィは悩める主人公を前に進ませるために、視線を過去に向けさせる傾向が強い。彼女にとってカリブの存在を書くことは、ただ単に人が持っていない特異な経験を書き表すだけなのではなく、自分の存在を確かめるために必要な儀式なのである。

おわりに

2019年2月14日、レヴィは乳癌によりこの世を去った。彼女は常々、「カリブの人の歴史を書くこと」と「カリブの人に意識を向けさせること」(Rowell 278)を使命に掲げていたのだが、その志は受け継がれているように思われる。彼女の存在は『レモン』の出版から徐々に知られるようになり、『小さな島』(Small Island, 2004)の小説とドラマがヒットしたのを機に、過去の作品に遡って再評価されるようになった。2019年の4月17日から8月10日にかけて、ロンドンのナショナル・シアター(National Theatre)で『小さな島』の舞台劇が上演され、連日満席の状態が続いた。上演後には、「最も貴重な作品の一つ」(Billington)という賛辞が寄せられたが、「ナショナル・シアターに黒人の観客が詰めかけたのは素晴らしい光景だった」(Shenton)とのコメントが出たのは、レヴィにとって一番嬉しいことではあらずだ。また2019年2月15日に出たBBCの追悼記事には「彼女は声なき先祖の物語を通して、人々の心を開いた」と記されている。レヴィが使命をもって行った書き残す作業は評価され、彼女亡きあとも、その遺志を引き継いで語る作業は続いている。レヴィの残した物語が、これからも変貌を遂げながら生き続けることを期待したい。

文献一覧

- Baxtor, Jeannette, and David James, editors. *Andrea Levy: Contemporary Critical Perspective*. Bloomsbury, 2014.
- Billington, Michael. "Small Island Review: Levy's Windrush Epic Makes Momentous Theatre." *The Guardian*, 2 May 2019, <https://www.theguardian.com/stage/2019/may/02/small-island-review-andrea-levy-windrush-national-theatre-london>.
- Brinkhurst-Cuff, Charlie, editor. *Mother Country: Real Stories of the Windrush Children*. Headline, 2019.
- Gifford, Clive. *The Empire Windrush*. HarperCollins 2014.
- Hickman, Christie. "Andrea Levy: Under the Skin of History." *The Independent*, 6 Feb. 2004, <https://www.independent.co.uk/arts-entertainment/books/features/andrea-levy-under-the-skin-of-history-67727.html>.
- Leavy, Andrea. *Every Light in the House Burnin'*. Headline Review, 1995.
- . *Fruit of the Lemon*. Picador, 1999.
- . *The Long Song*. Headline Review, 2010.
- . *Never Far From Nowhere*. Headline Review, 1996.
- . *Small Island*. Headline Book Publishing, 2005.
- . *Small Island*. Nick Hern Books, 2019.
- . "This is my England." *The Guardian*, 19 Feb. 2000, <https://www.theguardian.com/books/2000/feb/19/society1>.
- Matthew, David. *Voices of the Windrush Generation: The Real Story Told by the People Themselves*. Blink Pub, 2019.
- "Obituary: Andrea Levy." *BBC*, 15 Feb. 2019, <https://www.bbc.com/news/entertainment-arts-46897741>.
- Rowell, Charles Henry. "An Interview with Andrea Levy." *Callaloo*, vol. 38, no. 2, Spring 2015, pp. 259-81.
- Salandy-Brown, Marina. "Andrea Levy: 'This Was Not a Small Story'." *Caribbean Beat*, issue 70, November/December 2004, <https://www.caribbean-beat.com/issue-70/was-not-small-story#axzz5fb7dUXoR>.
- Selvon, Sam. *The Lonely Londoners*. Penguin Classics, 2006.
- . *Moses Ascending*. Penguin Classics, 2008.
- . *Moses Migrating*. Longman, 1983.
- Shenton, Mark. "Review - Small Island at the National Theatre." *London Theatre*, 2 May 2019, <https://www.londontheatre.co.uk/reviews/review-small-island-at-the-national-theatre>.
- "Vincet Reid." *The Guardian*, 24 May 2001, <https://www.theguardian.com/media/2001/may/24/broadcasting.schools>.
- Walker, Peter, and Amelia Gentleman. "Theresa May apologises for treatment of Windrush citizens." *The Guardian*, 17 Apr. 2018, <https://www.theguardian.com/uk-news/2018/apr/17/uk-still-uncertain-about-windrush-era-deportations>.
- Wambu, Onyekachi, editor. *Empire Windrush: Fifty*

Years of Writing about Black Britain. Phoenix, 1999.

Younge, Gary. "Interview: 'I Started to Realise What Fiction Could Be. And I Thought, Wow! You Can Take on the World!'" *The Guardian*, 30 Jan. 2010, <https://www.theguardian.com/books/2010/jan/30/andrea-levy-long-song-interview>.

山本伸 『カリブ文学研究入門』、世界思想社、2004年。